

## 「全鍍連」 2017年 8月号 理事長のよこがお

群馬県鍍金工業組合 理事長 伊藤 淳(株伊藤鍍金工業所代表取締役)

「棚から牡丹餅」



アインシュタインの言葉に「生き方は二通りしかない。世の中に奇跡など存在しないと思うか。世の中には奇跡しかないと思うか。」というようなものがあつたと記憶しております。私の人生にはまさしく奇跡しか存在していないかの如く運良く生活を送れてきたと思っています。そのため座右の銘は「棚から牡丹餅」であります。

そんな私ですが2011年の東日本大震災が起きた当時は私の幸運もここまでかと思いました。多くの人の生活に大ダメージを与え、私個人にも事業の先行きが暗転し、日本全体に絶望が広がり、暗い時代が来ると考え、間違いなく人生で一番落ち込みました。しかし、震災を受けた地域の企業の尽力で、時を大きく経たずして取引が再開しました。その時は「日本の底力」を感じました。

その2011年に米デューク大学の研究者、キャシー・デービッドソンがニューヨークタイムズで、「子どもたちが大人になる頃、その65%はまだ存在していない職業に就く」と主張しています。確かに小学生のなりたい職業に、ユーチューバーなる職業が上位になるご時世ですから驚くには値しないのかもしれませんが、しかし、製造業を生業としている身としては、将来なくなる職業としてますます多くの人に敬遠されてしまうのではないかと気が気ではありません。歴史を俯瞰すると、機械化により容易に紙が手に入るようになりましたが、紙漉き工は格段に人数を減らしました。そして紙漉き工は、現在では伝統工芸という面を色強く持っていると思います。その過程には、多くの紙漉き工を雇っていた会社が廃業の憂き目にあつたはずです。一経営者として日ごろは人材の確保に苦慮し、来る将来さらに大きな技術革新が起きた時に、いかに乗り切るかは大きな問題であると認識しております。進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの言葉にも「生き残る者は最も強いものではない。最も賢いものでもない。最も変化に富み適応できた者である」と残しています。ただ流されて変化するだけではなく、時には変化しないという選択をしなくてはいけない時もあります。私個人の変化としましては、1年ぐらい前に携帯電話をスマホに買い替えました。今さらと思いましたが、使ってみると、その奥深さに驚嘆し、もっと早く買うべきであつたと思っております。

さて、ここ何年という風潮でしょうか、自分らしさや本当の自分というものが、声高に言われています。行き過ぎた成果主義や、長時間労働へのアンチテーゼとして、個人の時間や幸せ、自分らしく働くといったことが重要視されています。そんな時代だからこそ幸福学というものがあるらしく、研究者が大真面目に幸せを研究しているといひます。そこで判明した幸福の法則は、「何事でもやってみようという気持ち」、「感謝の気持ち」、「楽観的な気持ち」、「他人と比較せず自分らしくと

いう気持ち」の4つであると言います。結局、昔から言われているようなことですが、確かに重要であることであると思います。その中でも「何事でもやってみようと思う気持ち」は年齢を重ねるごとに薄れていき、どうしても従来の考え方ややり方に傾いてしまい、変化に対して臆病になってしまいます。思うに、かつてうまくいった経験や成功の記憶が、今回も同じようにできるだろうと思ひ込みたいのではないのでしょうか。だからこそ、私はあくまで過去の自分は運が良かっただけであり、今後も運が良い保証はない、という気持ちで日々を邁進していきたいと思ひます。最後に、喜劇王チャップリンはあなたにとっての最高傑作はと聞かれた際にこう答えたと言ひます。「次回作さ」。